

## 福音のヒント 四旬節第3主日 (2017/3/19 ヨハネ 4章 5-42節)

### 教会暦と聖書の流れ

古代から伝わる洗礼志願者のための朗読箇所は、ヨハネ 4章(サマリアの女)、9章(生まれつきの盲人のいやし)、11章(ラザロのよみがえり)です。これらの箇所は、洗礼志願者がイエスとの出会いを深め、信仰の決断をするのを助けるために選ばれた箇所です。現在の朗読配分では、この3箇所がA年(今年)の四旬節第3、第4、第5主日に読まれます(なお、ここでは、『聖書と典礼』の短い朗読ではなく、伝統的な長い朗読に基づいて話を進めます)。

### 福音のヒント

(1) ヨハネ福音書を読むときに、物語は単なる出来事の報告ではないことに注意すべきでしょう。ヨハネは一つ一つの出来事をおしてイエスとはどういう方であるかが現れる、という見方をしています。この箇所では、この出来事をおして「イエスこそがいのちの水の与え主である」ことが現されるのです。そして、この物語は2000年前のどこかの誰かの物語ではなく、「復活して今も生きているイエス・キリスト」とわたしたちとの出会いに気づかせるための物語だと言うこともできます。

福音の舞台はサマリアの町です。サマリアは、紀元前10世紀にイスラエルの王国が分裂したとき、北王国の中心になった地方です。北の人々は、エルサレムを中心とする南のユダ王国と対立し、ゲリジム山に独自の聖所を持ち、後(のちに)サマリア人として民族的にもユダヤ人と分かれてしまいました。この物語の背景には、こういう民族と民族の間の「壁」があります。エルサレムか、ゲリジム山か、という礼拝の場所の問題は、ユダヤ人とサマリア人を隔てる大きな問題でした。



(2) もう1つの壁は、男女の間の「壁」です。当時の社会では、男性と女性是对等な人間同士として関わることはできないと考えられていました。女性は男性の性的欲望の対象であり、だからこそ距離を設けて守られるべき存在だと見られていました。道端で男性が見知らぬ女性に声をかけ、立ち話をするということは考えられなかったのです。だから、この女性も弟子たちもイエスが彼女に声をかけ、彼女と話していることに驚いたわけです(9節、27節参照)。

さらに、この女性と町の普通の人々との間の「壁」もあるようです。「あなたには五人の夫がいたが、今連れ添っているのは夫ではない」(18節)。彼女はイエスにこう言いあてられます。罪びとというよりも、男運に恵まれず、つらい思いを繰り返し、心が深く傷ついている女性と見るべきでしょうか。この町での彼女の評判は決して良くなかったでしょう。当時、水汲みは女性の仕事でした。女たちは朝や夕方に水汲みに集まり、そこでさまざまな情報交換(文字どおり、井戸端会議)をしました。「正午ごろ」(6節)水を汲みに来

たこの女性は、他の女性たちと顔を合わせたくなかったのではないかと考えられます。

(3) イエスはどのようにこれらの「壁」を乗り越えていったのでしょうか。イエスは自らも疲れ、渇く者としてこの女性に出会いました。「イエスは旅に疲れて、そのまま井戸のそばに座っておられた」(6節)と言われますが、きょうの箇所直前に、イエスの活動が誤解され、ユダヤに留まることができなくなったという記事があります(1-4節)。イエスの疲れの原因には、人々の無理解に直面したこともあったのかもしれませんが。だとすれば、このイエスの姿は、人とのつながりを失っていたこの女性の苦しみと通じ合います。

水はいのちのシンボルです。「生きた水」(10,11節)は、ヨハネ7章37-39節では「聖霊」を意味していますが、ここでは「人を真に生かすもの」と考えればよいでしょう。イエスは一方的に、彼女に対して「わたしがいのちの水を与えよう」と言うのではありません。まず、イエスのほうが「水を飲ませてください」(7節)と言います。イエスの彼女との関わり方には、「あなたも渇くし、わたしも渇く」という連帯性が感じられるのではないのでしょうか。この連帯性の中で、男性と女性の間の壁、ユダヤ人とサマリア人の間の壁、評判のよい人と悪い人の間の壁が乗り越えられると言えるのではないのでしょうか。

「霊と真理による礼拝」(23,24節)。霊は「神からの力」であり、真理は「イエスにおいて現されたこと」だと言えるのでしょうか。ただし、ここでは、あまり難しく考えず、単純に「真心をもって」と受け取ってもよいのかもしれませんが。ここにも人と人とを隔てる壁を乗り越えるものを見いだすことができるでしょう。

(4) 「水を飲ませてください」について、ジャン・バニエという人がこう言っています。「イエスは彼女に目を留め、『水を飲ませてください』と語りかけました。つまり、『あなたにお願いがあります』と伝えたのです。これは、『私のために何かしてほしい(あなたが必要だ)』とこちらから願って近づいていった本当にすばらしい出会いです。……本当に人を愛するとは、何かをしてあげることではありません。何かをしてあげて、人を傷つけ、潰(つぶ)してしまうことは実に簡単です。一生懸命にお世話をしながら、『あなたは自分ではできないでしょう』と、その人の無力さを見せつけてしまうこともあるからです。人を愛するとは、その人自身の美しさを自分で発見させ、見せてあげることだと思います。その人の存在する場所を作ってあげることです。あなたは大切な人であり、あなたには価値があると、その人自身に示してあげることです」(『心貧しき者の幸い』あめんどう刊。40-41ページ)

(5) 27節から、帰ってきた弟子たちとの間で、ミッション(派遣・使命)の話になります。弟子たちは自分たちで食物を手に入れましたが、イエスは別なところに弟子たちの目を向けさせます。「わたしの食べ物とは、わたしをお遣わしになった方の御心を行い、その業を成し遂げること」(34節)。イエスを生かすものは、神からのミッションを生きることなのです。そして「刈り入れ」について語り始めます。ヨハネ4章の中での「刈り入れ」とは心に傷を負った女性とサマリアの町の人々とイエスとの間で心が通じ合ったということだと言えるでしょう。目の前でもうすでに神の働きが実現している! わたしたちもそれに気づくことができるのでしょうか。